

“四国は1つ”と力を合わせて困難を乗り越える 「青プロ四国」成功を力に、次のステップも展望

自治労連四国ブロック協議会

6月11日に青プロ四国を開催

青プロ四国本番を6月11日、四国各県1か所・4会場をwebで結んで開催し、四国4県から80人以上が参加しました

午前中は、青プロメインテーマの1つ「民主的自治体労働者論とは？」についての基調報告と各県からの実践報告を受けてのワークショップを行いました。ワークショップではLINEオープンチャットを活用して、意見を共有しながら班ごとに発表しました。

午後からは「四国クイズ選手権」を開催。班ごとにタブレットで「ラウンジ」というサイトを利用し、クイズ番組に参加しているような感覚でクイズを楽しんでもらいました。webを駆使して四国4県をつなぐ初めての試みでトラブルも若干あり、課題も残りましたが、企画段階からwebを活かすいろいろな工夫を凝らして開催にこぎつけ、無事終えることができました。

“四国は1つ”自治労連四国ブロック青年部のこれまでのとりくみ

青年未来づくりプロジェクトがスタートする以前から、自治労連四国ブロック青年部では、定期総会の他、常任委員会を年2回ほど開き、反核ライダー四国コースなどに取り組んできました。また、2009年の「おきなわプロジェクト」、2014年の「おきプロNEXT」

を四国ブロックで実行委員会を立ち上げ取り組む中で、参加者から「また四国で集まりたい」という感想が寄せられました。これを受けて、毎年開催されている、愛媛の「ドキジャム」、高知の「DOKIWAKU ジャンボリー」を隔年で「四国ブロック交流会」に位置付けて、四国4県に参加を呼び掛けています。2018年には高知のよさこい祭りに参加するプロジェクトにも取り組みました。

こうした四プロ青年部の歩みを通じて、青プロを「ブロック」で取り組む土壌ができていました。



<高知会場に集まった青年たち>

職種・職域・雇用形態を越えて自治体&公共の青年がつながる企画を

2019年2月の準備会を経て、2019年5月に実行委員会を結成し、「青プロ・四国」実行委員会がスタートしました。

第1回目の実行委員会で青プロを「どのような企画にするか、したいか」を話し合い、

『民主的自治体労働者論』は難しい話ではなく、青年が仕事と地域を語り考えることが大切」「職種・職域・雇用形態を越えた自治体&公共の四国の青年がつながる企画と準備をめざしたい」など思いを共有。2020年6月の開催に向けて話し合う中で『3つの交流』でつながろう」をコンセプトに、レク交流、夕食交流、研修交流の企画を確認しました。その中では、香川県と徳島県の青年へのアプローチが課題だったため、1つの県が企画立案するのではなく、香川・徳島の参加者にも主体的に参加してもらえよう、4県で企画を分担しました。



<愛媛会場の様子>

プレ企画の成功を力に、「青プロ」本番の開催を決意

新型コロナウイルスの拡大に伴い、2020年、2021年の開催延期が決まる過程では、青年のモチベーションも下がる一方でしたが、感染が落ち着いた2021年12月4日に青プロプレ企画と位置付けて、愛媛のドキジャム、高知のDOKIWAKUジャンボリーを同日でリアル開催しました。

香川、徳島にはドキジャムかドキワクに参加してもらおうよう案内しました。これは感染拡大期においても、webで四国ブロック実行委員会を定期的に開催し、4県で相談しあえる体制を維持したことが、開催できた要因の

1つだと思います。プレ企画では、本番の企画を意識して、愛媛（ドキジャム）ではwebを使ったワークショップやゲーム、eスポーツ、高知（DOKIWAKUジャンボリー）では屋外で運動会を行いました。

プレ企画を終え、2022年6月開催を改めて確認しましたが、感染拡大が収まらず、3月の実行委員会で開催するかどうかを検討。感染状況から四国の1か所に集まって開催することはできないが、web開催して盛り上がるだろうかと不安の声に対し、プレ企画をwebで開催した愛媛の経験が語られたことよって、6月11日にweb開催することを決定しました。

青プロ四国に向けた各県での取り組み

【愛媛】愛媛では、独自に愛媛県実行委員会を結成し、青年部を中心に議論を進め、保育・医療の仲間も実行委員として参加し、職種を超えての参加や交流での全県を巻き込む企画も検討していました。

一旦企画延期が決まるもとの、企画や実行委員体制も組み直すこととなり、再度青年部を中心に議論を重ね、「活動は止めずにコロナ禍でもできることに取り組もう」と決め、県本部執行委員長の助言もあり、webを中心にした企画を出しあいました。愛媛県自治研集会『青年講座』ではZoomでの報告やLINEオープンチャットを使ったワークショップの実施、青プロ四国『プレ企画』では県内2会場をwebでつないでの学習会やネット・SNSを使って攻略していく『リアル脱出ゲーム』、ニンテンドースイッチを使った『eスポーツ大会』といった新たな試みなど、青プロ四国本番も想定して「コロナ禍でもできる企画」に取り組んできました。

【高知】高知では、独自に高知県実行委員会を結成。青年部を中心に女性部、保育部、医療部、現業評から実行委員を選出してもらい、プレ企画「運動会」、本番のクイズ大会を作り上げてきました。

基本的に四国ブロックの実行委員会を受けて、県実行委員会を開催し、四国ブロックで検討課題になったことや、高知担当企画の具体化を行いました。その中では、保育士あるあるや医療従事者あるあるなど、青年部だけでは思いつかないクイズのアイデアが出され、職種の垣根を越えた交流をすることができました。また、「親組合」にも登場してもらったクイズも意識的に用意しました。

【徳島】徳島では、この間、「青年部結成」を大きな目標としてきました。青年部結成に向けて、最初は、仕事の悩みや問題を話し合う「しゃべり場」から「労働組合運動で要求実現を」「青年同士の交流を」を議論する場に発展しています。青プロでは、こうした徳島自治労連青年部結成に至る過程を報告しました。

なお、徳島自治労連はいよいよ8月14日に待望の青年部を結成します。

【香川】香川県事務所は、青プロ四国を青年層の組合員拡大の絶好の契機と位置づけ、準備を進めてきました。まず、香川での自治労連の拠点である「さぬき市」に四国の仲間を迎えることを出発点としました。レクリエーションを「ツインパル長尾」（さぬき市）で、宿泊交流を「トレストア白山」（三木町）で開催することを実行委員会で決定し、内容を煮詰めてきましたが、いざ開催というところで新型コロナウイルス感染拡大により、2年連続の延期を余儀なくされました。本集會もオンライン開

催となり、香川に四国の仲間を呼ぶことはできませんでしたが、この準備期間に多くの青年層のつながりを作りことができました。

いつかは香川に四国の仲間を迎えたい、この思いは、青プロの取り組みを通じて、四国全体のものとなっています。

サポート体制が文字通り支えに

四国ブロック実行委員会には、青年層だけでなく、ブロック幹事会メンバー（各県組織三役等）が「サポートメンバー」として参加しました。企画立案の主体はあくまでも青年主体で、コロナ感染拡大で活動が制約される中でやる気がダダ下がり時はそとサポート。「青年主体」は全部青年任せにするということではなく、企画を具体化する段階など節目節目で大いにサポート（資料づくりやクイズ問題のスライドづくり）。こういった4県それぞれに青年層を支える体制があったことも青プロを成功できた要因の1つだと思います。

そして、愛媛、高知の県本部の青年部担当役員同士が密に連絡を取り合え、連携できる関係にあったことも、青プロを無事に終えるにあたって重要だったと思います。

青プロのその次へ～四国交流会の実現を展望

青プロは終了しましたが、感染拡大であきらめざるを得なかった香川開催と企画案（レク交流、夕食交流、研修交流）があります。リアルで集まれる状況になったら、「四国交流会（仮）」として、今度こそ香川県で開催しよう確認。「四国交流会（仮）」に向けて、青プロの反省点と、アンケートに寄せられた意見や感想、そして、今回できた横のつながりをしっかり活かしていきたいと考えています。